

利根川と古代の行田

行田市は、北に利根川、南に荒川が流れる起伏のない平野が広がっていますが、このような地形となったのは江戸時代以降で、いにしへの行田の風景は現在とかなり異なっていたようです。

地質的に行田市は、大宮台地北端の加須低地に位置しています。大宮台地は縄文時代前期(約5〜6千年前)ごろは北側の館林台地と一続きになっていました。そのころの行田市は、南北に台地が貫き、かなり起伏のある地形であったと思われる。利根川もその台地に遮られて、大宮台地の西側(現在の元荒川側)を流れていました。

それがどうして現在の姿に変わったのでしょうか。行田市が位置する加須低地は、関東造盆地運動で低地化していったものと考えられています。低地化により、妻沼から加須周辺地域の土地がすり鉢状に地盤沈下し、そこに利根川などが運んできた土砂が堆積。やがて台地が埋没し、平らな土地とな



利根大堰

り現在の地形になったのです。その過程において、利根川や荒川の流路は幾度となく変わり、行田市域の景観は大きく変わったものと思われます。利根川が大宮台地の東側に流れを変えた時期については、弥生時代から古墳時代前期(約1千600年前〜2千年前)ごろとする説と、奈良時代(8世紀)以降とする説があります。なお、後者の説では、古墳時代後期(6〜7世紀)には、酒巻地区の「やすらぎの里」付近から下忍小學校付近へと大宮台地の西側を利根川が流れていたものと推測されています。

行田市には弥生時代後期の遺跡がほとんどありません。そのことから、台地が沈下し、利根川の流路が東側に寄り始め、市内全域が利根川の氾濫区域になったものと推測されます。そして、この氾濫で堆積した肥沃な土砂が古墳時代以降の行田の農業を支えることになったと思われる。現在まで続いている「水の恵み」と「災害」との深い関わりが、利根川流路の東側への変遷と共に始まったのです。(文化財保護課 中島 洋一)

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



さきたま緑道は、さきたま古墳公園から武蔵水路に沿って鴻巣市まで続く、遊歩道と自転車道がある緑道です。緑道にはいろいろな花や木が植えられていて、四季折々の変化が楽しめることから、たくさんの方が散歩やジョギングをしたり、サイクリングをしたりしているよ。

また、さきたま緑道には、平成元年に開催された「第4回国民文化祭さいたま'89」に伴い製作された彫刻50点が展示されているから、散歩をしながらお気に入りの彫刻を見つけるのもいいかもね。5月は新緑の季節。家族や友人と緑溢れる緑道を歩いて、爽やかな風を感じてくださいね。

今月の表紙

4月6日、水城公園市民広場で水城公園桜ボンボリまつりが開催されました。

この催しで行われた行田大茶会は、目の前でたてたお茶を味わうことができるとあって、毎年大人気。来場者は、桜吹雪が舞う中で日常とは一味違ったお茶を楽しむことができたようです。



市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。市報をCD-Rに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。



環境にやさしい 植物油インキ

市報ぎょうだは 再生紙を 使用しています